

ミレニアム・プロミス・ジャパン 第31回研究会

南スーダン・人道援助の現場から： 赤十字国際委員会（ICRC）フィールド要員帰国報告会

- 【講師】** 淡路 愛 氏
(ICRC フィールド要員)
- 【日時・場所】** 2017年3月9日（水）午後5時30分～午後7時
文京シビックセンター 5階 会議室B
- 【概要】**
1. 赤十字国際委員会（ICRC）
 2. 南スーダン概況
 3. 民族分布
 4. 南スーダンの人道状況
 5. ICRC の南スーダン人道支援

I. 鈴木理事長よりご挨拶

昨日は国際婦人デーであった為、先程までアフリカ大使夫人会が関連するイベントを行っていた。挨拶された在京ウガンダ大使（アケチーオクロ氏）は、ウガンダで厚生大臣、高等教育大臣、地方政府担当大臣等を経験された方なのだが、日本の男女平等データを見るとバランスがとれていないのではないかと、女性たちは皆外に出て声をあげなさい、この国では叫んでも殺されはしないとお話をされ、勇気づけられてきたところだ。そんな日に淡路さんにご講演いただけることを大変よいタイミングだと思っている。

淡路さんのプロフィールを紹介させていただくと、上智大学法学部国際関係法学科を卒業され、その後カリフォルニア大学サンディエゴ校の国際関係・環太平洋研究大学院を修了されている。私は淡路さんが時事通信の外信部記者でニューヨークに派遣されていたときに知り合って、そのとき国連次席大使だった夫の北岡伸一も懇意にさせていただいた。その後ワシントン特派員を経て、2014年から記者をお辞めになって赤十字国際委員会でフィールド要員として1年間南スーダンで活動されていらした。それから、一つ付け加えると、当時、時事通信ニューヨーク支局長だった方は有名な記者なのだが、彼が「僕の人生で最大の衝撃は淡路愛さんに会ったことだ」とおっしゃったことが私の記憶に残っている。

II. 講演

私のポジションは、赤十字国際委員会の Field Delegate といって、ある国に派遣されてその国の一定の地域を担当し、その地域の中で起きていることすべてに責任を負うという立場。赤十字というとよくお医者さんか、看護師さんかと言われるが、私は医療の担当職員ではない。南スーダンの前にはフィリピンに 1 年おり、南スーダンにはつい先週まで 13 か月間赴任していた。担当地域は牧畜民、遊牧民がとても多いエリアで、ある牧畜民のキャンプでこの写真を撮った。

1. 赤十字国際委員会 International Committee of the Red Cross (ICRC)

私の所属する赤十字国際委員会について簡単に説明させていただく。赤十字はもちろんご存知かと思うが、赤十字国際委員会は、全ての赤十字運動の大本になった組織だ。本部がスイスのジュネーブにあり、世界最古の国際人道組織とされている。現在は約 90 か国の、主に紛争地で活動している。

1863 年の創設の経緯は、1859 年にスイス人実業家のアンリ・デュナンさんがイタリア統一戦争のソルフェリーノという町の戦闘現場にたまたま遭遇し、傷ついた兵士が治療も手当も受けずにそのまま息絶えていく様子を見て非常に衝撃を受ける。その時に彼がその場で町の住民を呼んで救護活動を展開した経験から、傷ついた兵士を、敵や味方の区別なく救う組織を作ろうと思い立った。それが赤十字思想の基になって、赤十字国際委員会 (ICRC) という組織ができた。彼は晩年にノーベル平和賞の第一回の受賞者にもなっている。

その思想が世界各地に広まって行って、ジュネーブ条約ができる。ジュネーブ条約というのは国際人道法ともいわれているのだが、戦争のルール、いかに戦時であっても最低限守らなければならないルールを定めた条約。国際社会はこの条約を通じ、ICRC にマンデート、任務を与えている。また、この赤十字運動が世界各国に広まって、日本は日本赤十字、南スーダンは South Sudan Red Cross、アメリカは American Red Cross というように、一国に一社赤十字・赤新月社というのがある。これは ICRC の下部組織ではなく、各国に独立した人道組織として存在する。そして、国連でいえば加盟国があつて国際連合があるというように、各国の赤十字社を束ねる組織として国際赤十字・赤新月社連盟 (IFRC) というものがある。資料には、赤十字の隣に赤新月があるのをご覧になれると思うが、これはムスリムの国で赤十字がキリスト教の十字架を連想させる場合があるということで、赤十字は使いたくないという国は、赤新月を使ってよいことになっている。しかし本当は、赤十字は十字架とは関係なく、スイスの国旗の配色を反対にしたものである。

以上の通り少し分かりにくいと思うが、棲み分けとしては、ICRC は紛争地での人道援助活動を主導。各国の赤十字・赤新月社あるいは IFRC (連盟) の方は、自然災害の救援活動、あるいはコミュニティでの健康指導等、もう少し地域密着型の活動をメインにしている。

今申し上げたように、地球上で今最も普遍的な世界 193 か国が加盟するジュネーブ諸条約によって、ICRC は武力紛争の犠牲者を保護支援するという任務を与えられている。従って、活動地域は紛

Millennium Promise Japan

ミレニアム・プロミス・ジャパン

争がある国ということになる。

また ICRC あるいは赤十字運動の原則として、中立であること (Neutrality)、公平であること (Impartiality)、独立していること (Independence) を非常に重視する。これは何を意味するかというと、紛争地で活動する際に絶対にどちらかの側につかないということ。政府軍、反政府軍、どちらが戦争をけしかけたとか、どちらが悪いとか、そういう議論には立ち入らずに中立性を保つ。公平というのは、人種や性別、民族、あるいは宗教的、政治的立場に関係なく支援をする。その人たちがどの民族に属して、反政府勢力エリアに住んでいるのか、政府軍エリアに住んでいるのか、そういうことは一切問わずに支援をする。あるいは ICRC は独立した組織であり、どこの政府の下部組織でもないし、政治的・宗教的団体との関係は一切ない。よく誤解されるのだが、国連とも関係がない。NGO とも立場が違う。創設の経緯から ICRC は国際人道法の番人的な役割も負っている。

2. 南スーダン概況

南スーダンについては、イギリス、エジプトの共同統治を経て、独立する前年の 1955 年からスーダン内戦が始まった。この時はもちろん南スーダンはスーダンの一部で、南部スーダンという形だったのだが、とにかくずっと内戦の被害の下にあった国である。第 1 次スーダン内戦、第 2 次スーダン内戦が、ようやく終わるのが 2005 年。国際社会の協力もあってようやく南北包括和平合意 (GPA) が結ばれた。この合意に基づいて、南部は独立したいのか、それともスーダンの一部として留まるのかということ問う住民投票が 2011 年に行われ、98%位の圧倒的支持を得て、独立が決まった。2011 年 7 月に独立した時には、地球上で一番若い国ということで、その当時はやはりすごく希望に溢れた時期だったと思う。独立前後も南北間でやや戦闘があったりしてきな臭い時期もあったが、だいぶ落ち着いた。しかし、2013 年 12 月に政権内の民族対立を背景とした政治的争いがきっかけで戦闘が発生して、ここからまた新たな、南スーダンとしての内戦が始まることになる。ICRC としては、内戦、civil war という言葉は使わず、非国際的武力紛争、non-international armed conflict という言い方をするのだが、この 2013 年の 12 月から、南スーダンという新しい国家の中で、非国際的武力紛争が始まってしまった。内戦や国内紛争が起きていると聞くと、全土が戦火に包まれているかのような想像をしてしまいがちだが、そういうわけではない。局地的、散発的に、色々なところで戦闘が起きたり、平穏になったりという不安定な状況がずっと続いていた。2015 年には一旦、和平合意ができて、統一政府を作るということで、第一副大統領のリエク・マシャルというヌエル族の政治家が昨年ジュバに戻ってきたりした。一番人口の多いのがサルバ・キール大統領のディンカという民族だが、ディンカと (人口第 2 位の) ヌエルで手を取り合ってまたやっというような合意ができたにも関わらず、去年の 7 月に首都ジュバで戦闘が発生した。2013 年からのこの国内紛争で、これまで 340 万人が避難しており、そのうち 190 万人が国外に難民として避難していて、国内難民も 150 万人いる。2016 年現在で 510 万人が人道援助の対象となっている状況だ。

3. 民族分布

この地図は南スーダンの各種民族、部族の別を表している。私が担当していたのは東部のムルレ

Millennium Promise Japan

ミレニアム・プロミス・ジャパン

という遊牧民族が沢山住んでいるエリアだ。私が拠点としていたのはボルという所で、ここはディンカのエリアである。東北部には人口第2位のヌエルという民族が住んでいて、2013年以降はヌエル族のエリアが反政府勢力に支配されて膠着状態となり、ここは政府の支配エリア、ここは反政府勢力の支配エリアという風に、各地が民族のラインに沿って、政府側を支持するか、反政府勢力側を支持するかという戦いになった。西部エクアトリア州、首都ジュバのある中央エクアトリア州、東部エクアトリア州一帯は比較的平穏とされていたエリアで、かつ、肥沃な農業地帯でもあった。ただ、昨年7月の戦闘以来きな臭い情勢が続いていて、局地的に戦闘も発生している。ジュバは今比較的平穏だが、周辺地域のヤンビオとか、イエイなども今や安全とはいええない状況になっている。因みに州とか地域という時にすごく困るのだが、2015年まで、南スーダンは10州しかなかった。大統領が2015年10月に28州に増やすとって色々新しい州を作ったのだが、これもまた紛争の火種となっている、反政府勢力側は21州だと言っているし、政府側は28州を採用しているし、この後更に3~4州追加されて、今は約32州だ。ICRCやその他の人道援助機関もなかなかこの呼称を使えない。便宜上、私は先ほどボマ州を担当していたと言ったが、話をする相手によっては、ボマ州は承認されていないわけだから、表立ってこの呼称を使うことは、政治的な意味合いを帯びてしまう。従って、人道援助機関等はかつての言い方、旧ジョングレイ州と言ったり、この辺を総称して上ナイル地域と呼んだりしている。

4. 南スーダンの人道状況

人道状況についてだが、2016年7月のジュバの戦闘は確かに衝撃的なことだった。私はジュバにいなかったが、当時はICRCも緊急に食糧や飲料水を配布したり、あるいは、デッドボディマネジメントといって、戦闘で亡くなったまま放置されている兵士の遺体をICRCが回収して各勢力側に引き渡すという作業をしたりした。その後、ジュバの情勢は比較的平穏に戻り、安定しているように思う。だが、各地で単発的、局地的な対立、戦闘が起きているので、国全体としての治安は悪化しているといつてよいと思う。それは単に政府軍（SPLA、スーダン人民解放軍）、反政府勢力（SPLA in opposition）という単純な図式の争いだけでない。

たとえばこれは長年に渡る南スーダンの問題なのだが、家畜強奪というのが多くの地域で頻発している。家畜が非常に重要な財産なので、家畜を増やす為に、隣の部族を襲撃して家畜を奪う。ついでに女性、子どもも誘拐するという犯罪がまだ頻発している。この家畜強奪によって、民族間の緊張や対立が更に高まったりする。先ほど地図で見たように色々な民族が隣接して住んでいるわけだが、たとえば私が担当したエリアでは、ムルレ族というのが遊牧民で、エチオピアに行ったり、ヌエルのエリアに行ったり、ディンカのエリアに行ったりして、家畜強奪をするグループがいる。そのことによってディンカとムルレの対立が更に激化したり、緊張が高まったりする。ICRC的にはother situations of violence といつて、その他の暴力的事象とでも訳せばよいだろうか、いわゆる国内紛争と認定するほどのスケールではないのだけれども、民間人の生命を脅かしているような暴力的事案というカテゴリで、家畜強奪等もまさにそのカテゴリに入る。

それから、部族間抗争というのも各地で問題になっている。部族の下にサブクラン（氏族）とい

Millennium Promise Japan

ミレニアム・プロミス・ジャパン

うものがある、たとえばディンカ族の中に更に小さな氏族の区別があったりする。たとえばある氏族の男性が隣の氏族の女性を殺したとする。そうすると、その氏族は男性の氏族に対して報復をするのだが、その時に殺人者を殺すのではなくて、その殺人者の親族の誰でもいいから殺すということがあって、部族間抗争が深刻な問題に至ったりする。

今のところ国民の3人に1人が難民・国内避難民になっていると言われている。推計で1200万人位の人口があるといわれているのだが、340万から350万位の国民が避難している。南スーダンの人は長年の内戦経験があるので、ものすごく敏感で、情勢がきな臭くなってくるとすぐに避難する。よく、「ブッシュに逃げる」という言い方をする。サファリパークのような場所を思い浮かべていただけるとよいのだが、乾燥したサバンナ地帯の少し木々があるような所に持つものも持たずにぱっと逃げ込む。そうすると家族はバラバラになる。子どもは学校に行っていたけれども、お母さんと小さい子は逃げてしまった。お父さんは釣りに行っていたけれども、みんなばらばらになってしまったということがすごく一般的である。何かあればすぐブッシュに逃げるというのが彼らの対処メカニズム。そして、戦闘の規模によって、隣村に2週間滞在して帰って来るかもしれないし、あるいは本当に歩いてエチオピアまで辿り着いて、エチオピアの難民キャンプに身を寄せるかもしれない。ケースバイケースなのだが、小規模であっても、武力衝突があると皆さんすぐに避難する。民家は草葺きでトゥクルと呼ばれているが、こういう家から何も持たずに逃げると、大体家は焼かれるか、家財道具を一切取られてしまって、戻ってきた時には何も無い。それで、人道援助機関がプラスチックシートやキッチン道具、鍋とかそういうものを配ったりして一から始めなければならない。そしてまた復旧に時間がかかる。このような悪循環があって、不安定な情勢が続いているので、開発という段階になかなか至らないという実情がある。

経済情勢も国全体として悪化していて、インフレ率が一時800%を超えたという位のものすごい物価上昇が続いている。私が赴任した2016年2月当方で1米ドル20南スーダンポンド位だったのが、帰る頃には1ドル100ポンド超だった。物の値段もどんどん上がるし、私達からしても物価は決して安くないので、現地の人にとっては食材を買うのが大変な状況だ。

それから、衝突があると住民が避難するので細々とせっかくやっていた農業なども続かなくなってしまう。本当は種まきのシーズンだったが、戦闘が始まって逃げなければならない。逃げたら、種も農具も全部略奪されて無くなってしまった。種まきができなかったから、今年は収穫がない。あるいは、なんとか種まきは終えていたのだが、そのあと干ばつにやられて全然収穫ができなかったとか、食糧不足が非常に深刻な問題になっている。つい先月、WFP等の国連機関が一部地域で飢餓宣言を出した位、複合的な原因によって、食糧不足というのがものすごく深刻な問題になっている。2016年の段階では500万人が支援を必要としていたが、今年は多分750万人位に増加するだろうと言われている。

WFPやFAO等が共同で行っているIPCというインシアチブがあるのだが、これは、そこが出している食糧不足の状況を表している図だ。赤い所は既に飢餓宣言が出されていて、オレンジのエリアが、飢餓が起こる寸前という状況になっている。この写真は、覚えていらっしゃる方もいるかもしれないが、1993年にピューリッツァー賞をとった、ケビン・カーターさんという南アフリカの写真

Millennium Promise Japan

ミレニアム・プロミス・ジャパン

家の方が南スーダン（当時はスーダン南部）に行ったときに撮ったものだ。ハゲタカが小さな女の子を狙っている写真で、彼はこれがニューヨークタイムズに載って、ピューリッツァー賞を受賞したのだが、当時、なぜこの子を助けなかったのだと言ってもものすごい論争が起きた。それですごく写真家が責められて、結局彼は自殺してしまった。これは 1993 年だが、その当時に起きたようなことと同じことが起こりうる。今、そういう状況だという風に WFP 等の国連機関は警告している。

5. ICRC の南スーダン人道支援

私達 ICRC が南スーダンで行っている活動については、予算規模が約 140 億円で、ICRC の活動としては、シリアに次いで 2 番目の規模である。南スーダンの国内 17 か所に拠点を持っている。これは政府軍支配地域にも、反政府勢力支配地域にもどちらにもある。病院も沢山あって、4 か所に病院、11 か所にもう少し小さな診療所がある。ICRC の活動の支援対象者は 150 万人で、南スーダン国内で 1000 人の職員が活動している。

この写真は私が担当していたエリアで私が撮ったものなのだが、先ほど申し上げたボマ州の州都ピポールという町だ。昨年 2 月にちょっとした戦闘があって、市場が全部焼かれたり、略奪されたりして、かなり打撃を受けた。この街の市場で木の下で土の地べたに座って野菜を細々と売っていたりする女性達がいて、なんとか支援できないかと考えた。ただ、一回きりの、何か配っておしまいという支援ではなくて、もう少し中長期的なことをやりたいと思い、この女性達を対象にして農業支援をすることにした。農業支援は、たとえば種と農具を配って、トレーニングのセッションを設けて、女性達にいかにしてもう少し多くの野菜を収穫できるかという指導をするプログラムが一つ。それと、この女性たちがもう少し良い状態で野菜を売ったりできるように、ちゃんと屋根があって、コンクリートの床があって、販売台があるような、そういうパーマネントな野菜市場を建設するという企画を立てた。これは ICRC のトラックで建設資材を運んで来た時に女性達が喜んでイベントを催してくれた時の写真だ。このように ICRC も、一回きりの食料配布支援だけではなく、復興や復旧に向けた繋ぎの支援を行ったりもする。

ICRC のオフィスは、ジュバや、私が拠点にしていたボル等色々な地域にある。ただ、たとえばベンチュエやマラカル等は今情勢がかなり悪化しているので、チームがジュバに拠点を置いていて、活動するときに現地に行くという、そういうハイブリッドな形を取っている。

その他、南スーダンでの活動は多岐に渡る。食糧配給の 91 万人というのは、2016 年の実績としての数字だが、食糧配給は多くの地域で空中から投下する。上空の輸送機から食糧物資を落として、地上の現場にいるチームがそれを現地の人に配布するというのを幾つかの地域で行っている。これはもちろん、食糧部門をリードしている WFP に比べると規模は小さい。それから、安全な飲料水の提供。これは井戸を掘ったり、修理をしたりする事業。さらに、生活必需品の配給を行うこともある。トゥクル（草葺きの民家）が焼けてしまった、何もなくなってしまったという人たちにプラスチックシートを配るとか、そういった活動だ。そして、種、農具、釣り具の配布。これは一回きりの支援よりも自分達で食べ物を作る、釣る、見つけるということをやってもらう方が、よりサステイナブルであるということで行われている。それから、少し毛色が変わったところでは家畜の予

Millennium Promise Japan

ミレニアム・プロミス・ジャパン

防接種も行っている。家畜がものすごく重要な財産だという民族が多いためだ。あるいは、医療支援。ICRCには移動外科チームがあって、戦地に近い現場の医療施設で、戦傷者を治療する。ヘリや飛行機を派遣して、戦傷者をエバキューエーション（避難）させたりするという事も行っている。さらに、これも南スーダン他、アフガニスタン、カンボジア等でも有名な活動だが、義足や車イス等の装具提供。これは、紛争や事故で足を失ったりする人がものすごく多くて、中には本当だったら失わずに済んだはずなのに、たとえば蛇に噛まれて、放っておいたから腐ってしまって切断せざるをえなかったとか、そういう事例もすごくある。従って、義肢装具の無料提供はけっこう大きな活動だ。あとは、刑務所・収容所の訪問というのも、ICRC 独特の活動。これも、敵味方の区別なく、国際紛争であれば捕虜、国内紛争であればそういう収容所に収容されている人達が人道的待遇を受けているかどうか、拷問を受けていないか、あるいは家族との連絡ができていないかどうか等をチェックする。そして、これも南スーダンではものすごく大きな活動であるが、戦闘が起きると皆が散り散りになるので、家族と再会する為の支援が必要だ。大多数の地域で携帯電話のネットワークもないし、自分の力で家族を探し出すのはすごく難しい。その為に例えば行方不明者を捜すという活動もするし、あるいは赤十字通信というのだが、もしある程度の場所が分かっている場合、たとえばうちの子がエチオピアの難民キャンプに逃げているはずだというのが分かっているならば、そのキャンプ宛にメッセージを書いてもらって、それを ICRC が国内外に無料で届けたり、返信の配達を引き受けたりする。これ（国内避難民の顔写真を掲載した冊子）は行方不明者を捜す為のツールで、市民はこれを見て自分の探している家族が難民キャンプにいないかどうかというのをチェックしたりする。それからこれも ICRC 独特の活動なのだが、軍当局や武装勢力と対話をして、もし国際人道法違反があれば、それについて是正を要請したり警告したりするという活動も行っている。その一環として、ICRC が軍隊や武装勢力に対し、紛争中に負傷した仲間を助けるための応急処置のトレーニングを提供したりもしている。ICRC は以上のような活動を現地で行っている。

III. 質疑応答

Q1: 活動の一つとして、女性に農業支援を行われているということだったが、支援を受けた女性以外の人達からなぜ彼女たちだけという批判が出たりすることはあるのか。そのようなことに対する対策や、どのようにバランスをとられているかということについてうかがいたい。

淡路氏: 何かを配布する支援というのは、絶対に問題がつきものだ。どういう風にやったとしても、当然苦情というか、どうしてうちは対象に入っていないのだとか、なぜこの村ばかりとか、そういうのは必ず出て来るのでそれを 100%避けるのは難しい。しかし、そういう事態になった時に、問題が大きくなるのを避ける為に、たいがいの地域に村の長老というか、コミュニティリーダーが必ずいるので、そういう人たちの承認をとっておく。今度ビニールシートを配るのだが、こういう人たちの協力を得てその受益者のリストを集めたと、これで大丈夫かということ村のリーダー達と話を納得してもらおう。それで仮に住民の人がうちは入っていないと文句を言ってきたとしても、こ

Millennium Promise Japan

ミレニアム・プロミス・ジャパン

ういうことで長老さんに理解をもらってやっているという風に言うしかない。そこは根回しというか、事前にできる限り地元の有力者の理解を得ることが一番大事ではないかと思う。

Q2: 時事通信で記者をやられていたということだったのだが、三つお聞きしたい。なぜ記者になろうと思われたのか。なぜ記者を辞められたのか。そして冒頭に鈴木理事長のお話で、時事通信のニューヨーク支局長だった方が、衝撃的だったのは淡路さんと会ったことだとおっしゃっていたということだが、どういう事情なのかということをお聞きしたい。

淡路氏: 10代の時から日本の外で何が起きているのかということにもものすごく興味があった。私が10代の頃はインターネットがなかったので、テレビの海外の特集番組を見たりして、海外の情報に触れるということにもものすごく興味があった。大学生の時に、国際政治や国際関係論に興味があるけれども、どういう仕事に就いたらこういう分野の情報に触れ続けていられるのだろうと思った時に、ジャーナリストになったら海外に色々行けて自分の知りたいことを知れるのではないかと思った。記者になろうと思ったのは大学生になってから。そして、書くことも好きだったので、ペンの記者がいいと思って時事通信に入った。すごく幸いなことに希望していた外信部に配属されて、地方支局を経て、ニューヨーク特派員になった。ニューヨークではたとえば国連本部の取材を担当していたし、その後ワシントン特派員になって、アメリカ政府の外交政策を担当していた。それはそれでもものすごく面白くてエキサイティングな仕事だったのだが、個人的には、たとえばアフリカの開発問題や緊急人道援助といったテーマにもものすごく興味があった。国連の担当をしていた時も、たとえばイラク戦争とか、当時の国際問題を取材できたことはすごく大きかったけれども、実際にイラクに飛んでイラクで取材をしたいという気持ちの方が強くて、要するに現場の仕事がしたい、フィールドワークをもっとしたいと考えていた。記者としてそういう機会がもしあったら辞めてなかったかもしれない。記者の仕事が嫌になったということは全くないのだが、もっとフィールドの近くで、どういう仕事ができるのかと模索した結果として、ICRCに辿り着いたという感じだ。三番目の答えは、何故だか分からない。当時私は、時事通信の外信部で、女性初のニューヨーク特派員だったし、女性初のワシントン特派員だった。今は女性特派員は沢山各社にいらっしゃるけれども、当時は他に女性がいなかったこともあるのではないかという気はする。

鈴木理事長: 淡路さんはいつもすごい大きなカメラを持ち歩いていらして、普通に東京でお話ししていても、カバンの中からこんなカメラを出される。お写真も好きでいつも持ち歩いていらっしゃるということだが、今のICRCはあまり写真を撮って発表してはいけないとかがっている。

淡路氏: ICRCは厳しい守秘義務が課されているので、あまり自分で好きに（活動に関する記事や写真を）発表したりできない。こういう写真もその都度承認を得て撮っている。

Q3: ICRCのマンデートに関わることで2点質問させていただく。一つ目は、政府と反政府の双方と交渉していくと思うが、交渉の際にテンションのバランスをとるための秘訣などあれば教えてください。二つ目は、ファンディングリソースに関して、インディペンデンスということで各国政府にファンディングを要請するのはなかなか難しいと思うが、これだけの事業をどうやって、どの

Millennium Promise Japan

ミレニアム・プロミス・ジャパン

お金で賄っているのかについて教えていただきたい。

淡路氏: 二番目のご質問からお答えすると、ICRC の場合は活動の予算のほとんどが政府からの拠出金なので、何パーセントかは分からないが、ジュネーブ諸条約の締約国が出しているお金がかなりの割合を占めている。もちろん個人からの寄付も一部あるが、予算の大部分は政府からの拠出金で賄われている。日本赤十字等はまた独立した組織で、日本赤十字社さんはまた別の方法で予算を集めていらっしゃると思う。

交渉については、すごくよいご質問だが、特にこれという何か一言で応えられるような答えは持ち合わせていない。私の担当していたエリアは政府軍支配地域だったので、SPLA の南スーダン人民解放軍の司令官と連絡を取って話をするということはあるが、どちらも股にかけてやり取りするということにはなかった。だが、たとえば私の上司は、旧ジョングレイ州というエリア全体を見ているので、政府軍、反政府勢力の両方とやりあわなければならない。もちろん向こうも情報を得たいし、反対側で何が起きているのかというようなことを聞かれたりもする。あなたのことをどうやって信用できるのか、敵方に情報をばらしているかもしれないではないかというようなことを言う人もいる。ただ、絶対にそこで、敵方の地域で何が起きているか、どういう話し合いをしているかというのは漏らさないということを強調する。私がよく言うのは、もし私が今あなたに、向こうの反政府勢力側で今こんなことをやっている、と言ったとしたら、たぶんあなたは私が同じこと（情報の暴露）を敵方にもしていると思うだろうし、そんな私のことは信用できないだろうということだ。そんなことをしたら、私も自分の命の危険にも関わるし、自分だけでなく、自分の仲間も危機にさらすことになる。ICRC にとってはコンフィデンシャリティ（守秘義務）というのが自分たちや情報源の命を守る手段にもなっている。そして、ICRC のもう一つの特徴として、「非武装」ということが挙げられる。ICRC は絶対に武装エスコートをつけない。赤十字の標章というのは、ジュネーブ条約で守られていて、絶対に攻撃対象にしてはいけないと定められている。赤十字にはバッジとかゼッケンのようなものがある、それをつけたり、ランドクルーザーやトラックにも赤十字の大きな標章がついていたりする。それは、これは絶対に攻撃してはいけない対象である、軍事目標ではないというサインだ。そうやって丸腰で活動していると、情報管理というのはものすごく重要だし、そこはもう本当に、紛争当事者と話して説得するしかない。軍人ももちろん普通の人間なので、ジョークを言い合ったりして、普通の人対人の信頼関係を築くというのももちろん重要だ。人それぞれ性格も違うし、相性などもあるがとにかく話す。そして説得する。原則は、もう何回でも繰り返す。ニュートラルで、コンフィデンシャルなので絶対に情報を外に漏らさないと強調する。因みに ICRC は政府や政府軍、反政府武装勢力などを表立って非難することはほとんどない。活動の行動様式として、「説得」とか「支援」とか色々なキーワードがあるが、「非難」というのは本当に最後の手段。150 年の歴史の中でも、20 回ないのではないかという位だ。たとえばある政府がこんなにひどいことをしている、止めなさい、というのを表立って名指し批判するということは滅多になく、水面下で一対一で問題点を指摘する。だから、人道法違反があれば、たとえば化学兵器の使用は人道法違反だから絶対に止めるようにということは言うけれども、表立って名指しで非難することはまれだ。それによって（武力紛争の影響下にある一般市民を保護・支援するための）アクセスを守っている。

Millennium Promise Japan

ミレニアム・プロミス・ジャパン

もちろんそういうやり方に対して批判的な人たちもいる。分かりやすい例でいうと、国境なき医師団（MSF）というのは、1960年代のナイジェリア・ビアフラ内戦のときに、政府軍の蛮行を非難しないのはおかしいじゃないかと反発して ICRC を飛び出した医師たちが作った。どの方法が一番であるということではなくて、たぶん棲み分けというか、役割分担ということなのだと思うが、そういうことで ICRC はいつも口を酸っぱくして ICRC はニュートラルであるということを毎回言っている。その原則に徹するというのもまた一つの強みなのではないかと思う。

Q4：活動の中に例えば職業訓練というものは含まれているか。それから、コミュニケーションに使うのは普通の場合は英語が非常に多いと思うが、英語で大体通じるのか、あるいは色々な言葉が必要なのか。それからスーダン全体についてなのだが、民族（エスニシティ）、部族（トライブ）、それから氏族（クラン）という形に一応カテゴリ分けをしておられるのだろうか。それから、宗教との関係で、キリスト教と土着の宗教が主だと思うのだが、エスニシティとかクランというものは大体宗教別に分かれているのだろうか。あとは、たとえば、随分昔のレバノン内戦の場合、民兵集団が合従連衡、要するに一日ベースで変わるというような無茶苦茶な状態になった。一週間で敵と味方が変わるとか、ひどい場合には2日か3日で変わるとかいったものだった。南スーダンの内戦というのはそのように見てよいのか。

淡路氏：職業訓練については、ICRC の場合はほとんどないと思う。生計支援として、たとえば先ほどの種と農具の提供というのは一番分かりやすい例だが、他にもたとえば手作りの小物作りのようなものを支援するプロジェクトがあるというのは聞いたことがある。その程度のものはあるかもしれないが、もう少しシステムティックな職業訓練というのは、特にジュバとかそういう大きな町ではたぶん UNDP（国連開発計画）とか NGO さんでやっていると思う。

言語に関しては、田舎に行けば行くほど英語は通じなくて、各民族、部族の言葉で通訳をしてもらわなければならない。英語よりもアラビア語の方がまだ通じるという感じだ。ただこのアラビア語は、ジュバアラビックといってすごく方言の強いアラビア語らしい。従って、うちもエジプト人やレバノン人などのアラビア語話者の職員が来たりするが、彼らも100%分かるわけではない。ただなんとなく通じあえるという感じではあるらしいので、アラビア語ができるとけっこう有利だ。だが田舎に行くと、アラビア語も英語もだめな住民が多いので、その部族の言葉、私のいたエリアの場合、ムルレ語でないと通じないことが多い。

民族については、ムルレ族とか、ジエ、ディンカは現地で表現するときにはトライブとっている。たとえばヌエルの中にも、氏族同士の争いというのはあったりする。ヌエルはクラン（氏族）社会であるが、私がいたムルレはクランという発想はあまりなかった。だから地域によっても部族によっても違うのだと思う。

宗教に関しては、やはり圧倒的にキリスト教徒が多い。イスラム教徒もいるが、それが部族によってということなのかどうか私はあまり詳しくないが、印象としては、圧倒的にキリスト教徒が多い。

武装勢力等の立場がコロコロと変わっていくのかというご質問については、それは実際にやはり

Millennium Promise Japan

ミレニアム・プロミス・ジャパン

ある。たとえば、シルクというトライブが住んでいるエリアがあって、かつて王国だったのだが、このシルク族は、政府側を支持したり、反政府勢力についたりというようなことを繰り返していた。もっとローカルな話でいうと、私の担当していたムルレ族の中でも、基本的には政府軍支配エリアなのだが、反政府勢力側と行動を共にしている武装グループがいて、彼らも立場をコロコロと変えたりする。政府側に再統合されて、政府側と共に戦うのだと言ってみたりするが、インテグレーションのパッケージに合意できなかつたりする。たとえば給料欲しさに統合にイエスと言ったが、政府軍に統合されたらどこに派遣されるか分からないから行きたくないと言って、やっぱり辞めてしまったりする。各地の情勢は様々なのだが、必ずしもクリアカットではない。このミリシア（民兵）が政府軍側なのか、反政府勢力側なのか、定かではないというようなことがままあるので、そういう意味ではあまりはっきりした線引きはできない。各地にそれぞれ特有の情勢や事情があるという感じだ。

Q5 : ICRC の活動について、たとえば種や農具の配布と研修とか、給水施設の建設等、緊急援助というよりはもう少し開発寄りの活動をされていることを知って驚いた。それに関連して質問だが、それはやはりニーズがあって他のドナーができていないから ICRC がやっているのか。それとも通常もやっているのか。給水については他の日本の NGO が入ってやっていたこともあると思うのだが、こういう不安定な状況で業者が安全を確保できない中でやるというのはすごく困難なところがあると思うのだが、ICRC は予算の制約が比較的柔軟だからできるとかそういったことがあるのか。3点目に、ICRC のバッチがあればジュネーブ条約上、絶対に攻撃対象にはしてはいけないとはいえ、昨今は南スーダンに限らず世界的に中立であっても対象にされるリスクが非常に高まっている。たとえばシリアでも ICRC の病院が攻撃対象にされたりすることも増えていて、絶対に安全とはいえないところがあると思う。安全管理上、困難を抱える中でどのようにされているのか教えていただけたらと思う。最後に、南スーダンの今後の展望について、もっと長引きそうに感じるのだが、今後どうすればよくなるだろうということに関連してお考えがあれば教えていただきたい。

淡路氏 : 長期的な支援については、ICRC の柱の活動では決してないし、近年そういう方向にも少し手を出していることは内部で議論もあるし、緊急援助に徹するべきだという考え方の人もまだまだ多いと思う。とはいえ、南スーダンの場合は 1960 年代から WFP が食糧投下を始めていて、今でも食糧投下しているというような状況だが、食糧を投下しているだけでは状況は変わらない。その中で、Resilience Building Project と言っているのだが、住民たちの回復力をつける支援をする。たとえば先ほど紹介したマーケットを建設するプロジェクト。マーケットの建物を作って、引き渡しの際に覚書のようなものを結んで、こういう条件で使うようにということを話し合いはするが、ICRC がずっと管理していくわけではなくてあとは住民の人達にやってもらう。ICRC は決して今後もいわゆる開発事業というところには手を出さないと思うが、紛争があって、紛争直後の緊急に食べ物と水が必要なフェーズがあって、それから中長期的に腰を据えてこの地域を発展させていこうという活動の間にはかなりの長い繋ぎ期間というものがある。そこでは、開発機関にもできることはあるだろうし、緊急人道援助機関にもできることはあるだろうと思う。ご指摘いただいたように、

Millennium Promise Japan

ミレニアム・プロミス・ジャパン

他の機関がやっていないことというのは、常にチェックしていて、援助が重複しないように、WFPが食糧を投下している地域ではうちは投下しないとか、そういう最低限の棲み分けのようなものは、南スーダンのように人道援助の規模がものすごく大きい国では必要だ。先程のプロジェクトもそういうことをやっている機関もないし、そういうニーズがあるという風に判断して企画したものだ。

予算のことは申し訳ないが私は全く詳しくないのだが、今年度どういう事業を優先してやっていくかというプランニングは毎年もちろんするのだが、南スーダンの場合は物事が予定通りに進むことはまずない。そういう意味では、柔軟な運用をもしかしてしているのかもしれない。ICRCの場合、ほとんど事業を外注せず、自前でやっているというところはもしかすると強みかもしれない。建築工事等で一部、業者に発注することはあるが、基本的に色々な援助プロジェクトとか保護の活動等は全部 ICRC の職員、自前のリソースでやっているのだから、変更がききやすいということはあるかもしれない。

安全性のことだが、おっしゃる通り 100%安全というのは絶対にありえない。もちろん国際人道法なんて知らない、どうでもいいというグループも多いし、無邪気に善意を期待することはできない。従って安全対策というのは ICRC にとっても非常に重要で大きな問題だ。南スーダンで、私たちが比較的現場に出て活動できるのは、他のテロ懸念がある国に比べると、外国人や援助機関が攻撃の標的になっていないからだ。従って、移動の自由はすごくあった。ただ、安全体制というのはすごく厳しく敷いている。もし戦闘が始まれば、そのエリアからチームを退避させるとか、あるいは移動はほとんど全て飛行機なのだが、たとえば私の担当エリアにフライトがある時は必ず軍司令官に電話して、情勢を確認する。ゴーサインが出なければフライトは飛ばないとか、非常に厳しい安全基準のある中でやっている。

今後の展望については、本当に目途が立たない。比較的安全だと言われていたエクアトリア各州で情勢が悪化している。ミレニアム・プロミス・ジャパンもこれからウガンダで事業をやられるというお話だが、確かにウガンダ等に一般市民が今ものすごく逃げている。私の同僚でも、家族をウガンダに避難させたという人たちも沢山いる。一緒に活動していたフィールドオフィサーという現地の南スーダン人の職員はエクアトリア出身の人が多く、というのは、ディンカ対ヌエルの争いと関係がなく、比較的どこにでも行ける。だが、情勢がこういう風になってきたので、それもどうなるかという感じだ。だから情勢展開ということでは、本当に分からない。ジュバだけ見ると、昨年7月にあんなことがあったということを考えると今は落ち着いている。だからどこを見るかということにもよると思う。

Q6: 現地の人達はどういう風にジュバを見ていたのか。和平合意などがあってもあまり信じていなかったのではないかと。また、現地の人達は情報をどういう形で得ていたのか。

淡路氏: どの地域に住んでいるかにもよるとは思うが、情報は意外に皆さん早い。テレビはないし、インターネットも使えないが、ラジオを持っている人はたまにいる。ラジオミラヤという国連がやっているラジオ局が、ニュースを流していたりするので、そういうところから得ているのだろう。ピポールは幸いボマ州の中で唯一携帯電話が通じる。ジュバに親戚がいたりとかして、携帯電話で

Millennium Promise Japan

ミレニアム・プロミス・ジャパン

連絡を取り合ったりしているのだろうと思う。情勢について現地の人はどう見ているかというのは難しいけれども、ソーシャルメディアで色々噂が広まるということもある。ある程度の教育レベルがある人達だったら、そういうツールも使っていて、常に政治の話などをしている。

和平合意については、たぶんどどの地域でも、現地の人達の関心事はもっと身近なところにある。ムルレのエリアでいえば、政府軍対反政府勢力の戦いというよりは、ヌエル人が攻めて来るかどうかということの方が彼らにとっては懸案だ。ヌエル人のユース（youth）というのがあって、地元の民兵というか、若い人たちがコミュニティを守る為に徒党を組んで、グループを作っていたりする。ムルレ族は家畜強奪や子どもの誘拐をしたりするのでとても悪名高いのだが、時々ヌエル人やディンカの人が、仕返しで攻めて行ったりする。そういう方が彼らにとっては身近な恐怖だったりする。多分そういう風に自分たちの生活を脅かすものが一番の関心事なので、そういう情報が噂などで伝わってくると、一般市民が逃げ始めたりする。また、市場に行くとなんが起きているかすごくよく分かる。通常なら市場に行くときだいたい会いたい人に会えるが、例えばインセキュリティの噂が広まると市場が空っぽだったりする。地元の人達特有のコーピングメカニズムというのがある。多分エリアによって彼らが一番危険に感じるものというのは違って、それに従って逃げたりするのではないかと思う。

Q7：先程の ICRC のプロジェクトを見てもものすごい量の食糧や水や種子等を運んでいる。食糧は空中から投下すると伺ったが、多くの部分は陸路でトラックということになるかと思うが、南スーダンの特に任地だった場所の道路インフラの整備状況はどうなっているのか。

淡路氏：西部のワウなども比較的大きな都市なのだが、私はそういう所には行ったことがないので、知識が一定地域に偏っているのだが、基本的に全く整備されていない。ワウや一部都市は別かもしれないが、ジュバを除いては、基本的に道路は未舗装だ。大体 11 月・12 月から 4 月・5 月位までが乾季なのだが、乾季は陸路で物を搬送できる。ただ、人道援助機関や WFP などの機関も陸路でものを搬送するのは、安全が確認できているルートに限られるので、全国どこでも行けるというわけではない状況。従って、乾季であっても行けない所もある。去年、ICRC はジュバからボル、ボルから反政府勢力地域側のワットという所に食糧を運ぶコンボイ（輸送車列）を初めてやったりしたのだが、こういうのは前線を跨ぐのでやはり危険が伴う。当時は去年 7 月の衝突前で、比較的情勢が安定していたということがある。あとは、例えばジュバからワウまでこの間輸送隊が出たと言っていたので、一定のルートにおいて通行可能な場所はある。でも、雨季になると道路が閉ざされるので、人道援助の場合はかなり空路を活用していて、陸路は一定のルートのみである。加えて、なるべく乾季のうちに物資を各地の倉庫に運ぶ。特に食糧援助機関はそうだと思うのだが、プレポジショニングして、雨季に備えるという工夫も必要になってくる。

Q7：道路は、砂利舗装もされていない、土の状態ということか。一応道路としては敷かれてはいるのか。

淡路氏：これがピボールにいた時のコンボイの道路の写真なのだが、本当にがたがたで、時速 20 キロ出せるかどうかというような状態である。だから時間もかかるしなかなか大変だ。

Millennium Promise Japan

ミレニアム・プロミス・ジャパン

Q8 : 安全な飲料水を 10 万人に提供するという話があったが、井戸とかそういう水関係のインフラはどの位あるのか。都市部は整備されて農村は未整備ということはあると思うが、任地の辺りで、プリミティブな水道は整備されているのか。

淡路氏 : ジュバを除いて考えると、ボルはこれですごく大きな町だ。かなり大きな町なので、ボルではウォーターシステム整備を ICRC でも支援していて、街中では水道で水が出てくる。でもそれはボルがかなり大きな町だからということだと思うのだが、たいがいの普通の小さな町では、人道援助機関の支援で、井戸が町の中に幾つかあるという感じだ。だから地元の女性はプラスチックの灯油缶のようなものを持ってきて、そこで水を汲んで帰る。けっこうな世帯をカバーしているので、大きな町だったら十幾つあるかもしれないが、小さいところだとそれが一つとか二つという感じで、井戸が全く無いようなところもある。衛生設備については、私の担当していたエリアはきちんとしたトイレがあまりない。トイレを作っても、汲み取ったりするようなちゃんとした下水の設備がないので、トイレ用に掘った穴があふれてくると皆使いたくなくなるので結局外ですることになってしまう。もちろん簡易式のトイレは NGO の施設や人道援助機関の基地にはあるが、普通の人達はそういうのもない。だから本当に開発は遅れている。スーダン時代、南部の方はずっとある意味ネグレクトされていた。北部のアラブ系の住民が優遇されて、彼らが国を支配していたから南部の開発はずっとされていなかった。

飛行機に 1 時間乗るだけのウガンダやケニアへ行ったりすると、こんなに隣国は発展しているのに、この国が発展していくにはどうすればジャンプできるのだろうと思ったりする。そこはもちろん開発の専門家の方などの意見をお聞きしたい。

Q9 : 任地の周辺の教育はどのような状況か。特別な緊迫した状況以外では、学校があってそこには教員もいて、きちんとした授業が行われているのか。

淡路氏 : 小学校は、ある程度の大きさの町にはある。たとえば、ピボールは州都で小学校は 4 つ位あったが、中学校は先生もいないし、キャパシティがないということで、建物はあるが学校がやっていない。遠隔地になると、学校もないし、病院もない。識字率はものすごく低くて、たぶん世界最悪くらいのレベル。遊牧民の人達は季節によって移動しているので、子どもを学校にやらなかったりもする。あとは先生が給料をもらっていなかったりして、そんな中でもボランティアで子ども達を教えている若い人がいたりするのだが、やはり教育も遅れている。

鈴木理事長 : 淡路愛さんは有名なジャーナリストに衝撃を与えた女性なのだが、女性という立場で、現地で何か困ったことはなかったか。それから、ウガンダ北部の難民居住区に私も去年 10 月にうちのスタッフと共に行ってきたが、私達ミレニアム・プロミス・ジャパンは、今水やトイレやフード等色々緊急支援が必要とされている中で、メンタルヘルスケアを行いたいと思っている。やはり心身共に健康でないと、もし教育の場だけが与えられてもあまり吸収できないので、そういうことについてご意見いただきたい。よく聞くのは、女性は性的な暴力にあっているけれどもなかなか

Millennium Promise Japan

ミレニアム・プロミス・ジャパン

話に出てこないということだ。私がウガンダ北部の現地のヘルスセンターに行ったら、芝生の上に女性や子どもを守るということは特権ではなくて人権なのだというようなことが言葉で表現されていた。まだ人権ということが分からなくて、お父さんがお母さんを殴るのは人権侵害だということから伝えていかなければならないというような世界だと聞いている。それから南スーダンに流れてくる難民の人達の話聞いたところ、かつてのルワンダのようなことが一部起こりつつあって、着の身着のままで逃げて来たという話だったのだが、どういうルートを逃げてくるのだろうか。

淡路氏：女性だからということは、南スーダンについては、私は感じたことはない。女性の地位は現地では低いのだが、外国人は別扱いだ。だから、南スーダンの女性が私のような仕事をするというのはちょっと考えにくいけれども、外国人だから特別だという感じで済まされているところはあって、そういう意味で、南スーダンでは性別によって苦勞したということはない。男女差別の懸念がある国でも、逆に男性職員だと、女性の被害者と面談したりできなかつたりする場合がありますので、女性だということが強みにもなれば、チャレンジにもなり得るところなのかなと思っていて。メンタルヘルスの支援というのはものすごく大事だと思う。ICRCにもメンタルヘルスのことを担当する職員はいたが、たとえば私の担当エリアではそういう事業はなかった。でもすごく必要とされている分野の活動である。鈴木理事長のおっしゃった通り、人権教育はものすごく基本的なところから大事である。女性たちはそういうことで暴力を振るわれてはいけないのだとか、そういう声を上げていいのだというようなエンパワーメントもされていないので、特に難民キャンプのような状況だと、それはすごく必要とされる活動ではないかと思うので頑張っていたきたい。

以上